

## 今回の報告について

～ 日本英語検定協会 会長・名誉顧問より ～

### 名誉顧問 長 勝彦

研究助成選考委員の厳しい審査をパスした各報告書は、いずれも研究計画、研究結果ともに、レベルの高い素晴らしい報告書であった。特に実践部門においては、将来、これらの研究成果を公開授業、たとえば、全国英語教育研究団体連合会(通称:全英連)などを通して、多くの英語教師との共有を目指して下さい。素晴らしい成果が全国に広まって行くことを期待しております。

### 名誉顧問 小池 生夫

今回の応募論文は研究に関する論文が4件、実践に関するものが5件、調査部門から1件あり、計10論文が審査を通った。この中で集中しているのは研究と実践部門で、全体で10編中9編になり、調査部門は1編である。この傾向は昨年と同じであり、ここ数年来の傾向となっている。助言指導の先生方もメンバーが交代して若返り、一層熱心に指導して下さるのが論文を読むと見えるのは嬉しい限りである。

今回の研究成果は従来の評価に関する分野での新しい英検の研究と実践による莫大な資料の利用に基づく歴史的発展によるものでもあるが、国際的に見て米国で始まった独創的理論研究が、わが国の英語テスト理論の研究に一層直接の利用を与え、本研究の研究部門や実践部門と関係があるペーパーの作成に関連して、統計学研究においても長足の進歩を見せるに至った。こういう研究の継続、発展に依る結束、協力しての活動による貢献度は大きい。現在ではその流れは多角的に拡大、進歩し、テスト研究の発展の速さも幅も広がってきたという背景がある。最近では、この流れに本格的な興味を持つ若手の研究者が参加し、増えてきて、競って研究をするという傾向が出てきている。富士山型の応用言語学的研究が末広がり発展するようになってきた。また国内から海外の日本人の情報交換の拡大を含めた国際的刺激を受けて、発展してもいる。

### 名誉顧問 村木 英治

コロナ禍がまだ完全に過去のものとなっていない現在、しかし、一方で、以前の生活が確実に戻ってきている。研究活動は研究トピックの選択から開始して、このEIKEN BULLETINのような研究専門誌での掲載という結実まで、通常、複数年に渡るものである。したがって、今回の掲載論文のほとんどは、コロナ禍というトンネルを潜り抜けてきたのだろう。AIという最新のトピックもあったが、ネットでの動画映像のテーマ選択など、その影響は明らかだ。日本人の英語教育に関連する研究は時代の要請に応えるものが主だから、そうであることは健全な傾向だといえる。コロナ禍に負けず、時代の変化に対応できるエネルギーの持続が感じられた。また、特にどの論文も添付資料が充実している。個人的には、三上氏の論文が、時宜を得て、これからの英語教育における必要性と可能性によく応えているものと思った。

---

## 会長 吉田 研作

今回の多くの研究は、実際の学習状況の中から生まれた課題を基にしているように思う。昔の研究は、理論が先行し、その理論に基づいた仮説を検証するために、恣意的に被験者を選び、さらにその被験者を実験群と統制群に分けて実験をした。その頃は、できるだけ純粋な結果を得るために、実際の教室ではなく、実験室のような場所で行われた。そのため、出てきた結果は、実験室のような無菌状態では有効でも、普通の教室では、なかなか確認できなかった。それに対して、現在の研究は、実際の学習状況の中から課題を発見し、それがどのような要因によるものかを仮説として立て、検証するという方法が取られる。今回は、まさにそのような現実をベースにした研究で、実際に役立つものが多いと思う。

---

## 名誉顧問 和田 稔

第35回「英検」研究助成の入選者の論文を読んだ。論文は研究助成の選考委員の厳しい審査をパスしたもので、それらの論文を読むことは楽しく、また、知的な関心を刺激される。

私は第35回のEIKEN BULLETINを一つの興味・関心をもって読み始めた。それは論文が日本の小・中・高等学校における英語教育の実際を直接的に視野に入れているのかという興味・関心である。研究論文をそのような観点から読むことは学術的論文の普遍性を歪めることであろう。しかし、日本の学校英語教育における実際や課題など直接的に研究し、その結果を発表するという問題意識もまた忘れてはならないのではないだろうか。

例えば、このような観点から論文を読むと小学校における英語教育を直接的に研究対象にした論文が無いことに気付く。日本の小学校での英語教育は長い年月にわたっての紆余曲折を経て教科に位置づけられたことは周知の事実であろう。小学校における英語の指導や学習にはいろいろな課題があるはずである。